

私の戦争体験

福岡市南区 寺尾 友良

硫黄島が陥ち、サイパンも陥ち、沖縄も陥落して、あちこちの主要都市に空襲のニュースを聞き、福岡もいつ空襲されるとも限らず、取りあえず急遽防空壕を造り、万一の時いつでも避難する必要があると知らされ、今日はその防空壕掘りであった。余り体力のない私には、一日掛かりの重労働であった。我が家の人数が入るに適したスペースと1 m半か2 mの深さが必要であったが、せつかく苦勞して造った壕は1日だけの失敗に終わった。雨が降り込み小さな池と化していた。バケツで水を汲み出したが底は泥濘となり、しかたなく隣組の老大工に依頼した。初めから頼めば良かったのにと後悔したが、さすがプロ、まわりに古材を利用して雨の入らない立派な壕が完成した。

母は祖母からもらって大事にしていた雛人形を入れた。女の子が生まれたら飾るつもりであったらしく、我が家は残念ながら男ばかりの4人兄弟で、2人が欠け長男は出征して博多海軍航空隊にいた。

ラジオから流れるニュースは、「空襲警報敵機は背振山系より侵入せる模様」と何度も繰り返していた。間もなく何十機のB29の爆音と夜目にも写し出された機影から、炎の固まりに包まれて、福岡市中心街を襲った焼夷弾は、曳光を引きながら、数時間福岡市を完膚無きまで焼き尽くし、悪夢のような一夜が明けると防空頭巾と煤に汚れた顔の人々の群が一団となって疲れた足取りで通っていく。

それから数日が立ち、広島に新型爆弾が落とされたとのニュースがあり、数日後に長崎にも落とされたとの情報があり、やがて隣組長より15日に大事な放送があるからラジオを聞くようにとの回覧板があったが、雑音が多く何も聞こえなかった。ただ戦争が終わった、日本は無条件降伏したとの噂がぱっと広がった。噂はやっぱり本当であった。アメリカ軍がやって来て、婦女子にいたずらするとのデマもいつしか収まり、米軍は鬼畜ではなく割合紳士的であった。

そんな時、鉢巻にモンペ姿に竹槍で「欲しがりません勝つまで」はと、叫んでいた淑女や乙女達は皆空腹をかこっていた。世相が安定すると、毎日買い出しに血眼であった。その中で隣組の一番若い奥さんがどこで仕入れるのか、買い出しニュースを知らせてくれるのが有難かった。我が家は今でいう野間四つ角、昔は古めかしい野間道目木と言っていた。箕島の日本ゴム(今のナショナル)の会社や寮も家から見通せる所にあった。西鉄高宮駅は徒歩10分程で割合交通の便がよく、それを利用して田舎に買出しに行ったものだった。今日は玉子が2、3個手に入ると聞くと、宝物?が入手できるとあって、張り切って電車に乗った。

農家の人も大変だったと思う。僅かの好意にどこからともなく集まる人達は、日毎に人数が増え、しかたなく番号札が配られるようになった。今日はこの人までですと札が配られ、最期

の札を手にして飛び立って喜ぶ人、落胆して帰る人、悲喜こもごもの一日であった。

そんなある日、若奥さんが疲労が重なり病気になってしまった。一人では心細かったので、母と二人で行くことにした。着いてみると行列は跡形もなく、通し番号だけが散らかっていた。農家への感謝の意味も含めて片付けた。そのまま帰るに忍びず他の農家を訪ねることにした。農家に行けば、簡単に食糧が手に入るとばかりに思っていた私達の考えは甘かった。方々まわったが何も買えなかった。お金は足りない、着物や品物ならば食物と交換してやってもいいとのこと。

その頃博多港に、今日は何十万の外地からの引揚者が、また博多駅には内地勤務の兵士の帰還の噂を聞く。幸せにも兄は博多海軍航空隊にいたので、終戦2日目に毛布を土産に帰って来た。一人増えた分だけの食糧が欲しかったのである。

戦後1、2年たっても少しも食糧事情は好転せず、買い出しの農家も毎度のことであまり良い顔をしてくれなくなった。ふと立ち寄った農家の奥さんは臨月であった。母は話しの糸口を探すではなく、心から自然と口に出たと言う。「奥さんお目出度うございます、今度はお嬢さんですね」と声をかけると、「ありがとうございます。最初のは男の子だったので今度は是非女の子が欲しいです」「大丈夫ですよ、お顔が穏やかですからきっと女の子のお子さんに間違いないですとも……」。

母は翌日あんなに大切にしていたお雛さまを差上げる。我が家には女の子もいないし、喜んでくださる人にあげたらお雛さまもきっと喜んでくださるし、また、お雛さまの功德になると持って行った。

暫くして、母は上機嫌で帰って来た。何も見返りを求めず、真心を土産に出掛けたからそれが通じたのであろうか、その好意がとつても嬉しかったらしい。リュックも風呂敷も持たずに行ったので貸してくれた風呂敷に芋を詰め、あしたはリュックを持って来るように……お芋だったらいつでもあげると言われたとか……、晴れやかな顔であった。

雛飾りは3回に分けて運ばれた。季節はいつしか若葉の溢れる爽やかな5月である。遠目に鯉のぼりが見える、近づくとあの家であった。雛飾りをあげた家である。母の願いの占いは見事にはずれ、また男の子が生まれたらしい。母は顔色をかえてお詫びしなければ申し訳が立たない、誠意を見せなければと言ひ張る。

しかたなく今来た道を引き返すと、庭に咲いた花を切っている奥さんの姿が見えた。母は悪びれず正直に謝った。「御免なさい、男のお子さんが生まれたのですね。お雛さまが無駄になって申し訳ありませんでした」と言うと、にっこり笑って「あなた達を待っていたのですよ」「でもあの鯉のぼりは?」「お客さんからの頂きものです。長男が生まれた時お祝いできなかったのが今年を初節句にしたのです。それよりも雛飾りどうもありがとうございました、どうか娘を見て下さい」と嬉しい弾んだ言葉が返って来た。ぐっすり寝こんでいた幸福そうな寝顔と美味しいお茶とふかし芋を縁側で頂戴した。あれから50年、あの優しい奥さんは今もお元気だろうか、遠い遠い昔である。